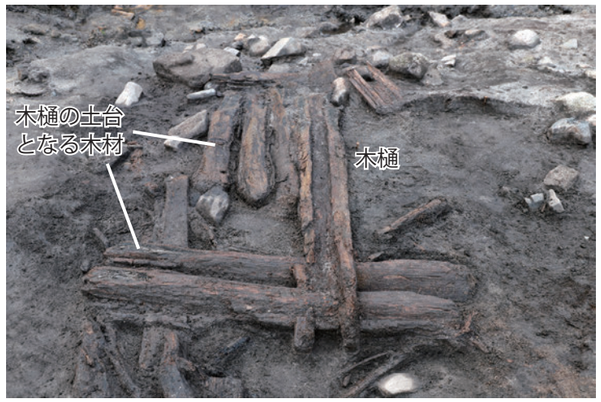


写真２　木樋

写真３　木材集積遺構

写真４　建築部材集積遺構

写真５　有孔円板、管玉

まとめ

今回の調査で特に注目される遺構は、浅い溝の底に設置された古墳時代前半期の木樋です。この木樋は、少し上流で湧出した水を樋に導き、下流側の溝へと流す機能を果たしていたと推定されます。このような機能を持つ木樋は、古墳時代の「導水施設」として、祭祀に用いられた遺構によく見られます。ただし、今回の調査では、覆屋を構成する柱穴や水を貯める木製容器の槽などの「導水施設」を構成する要素は確認されませんでした。

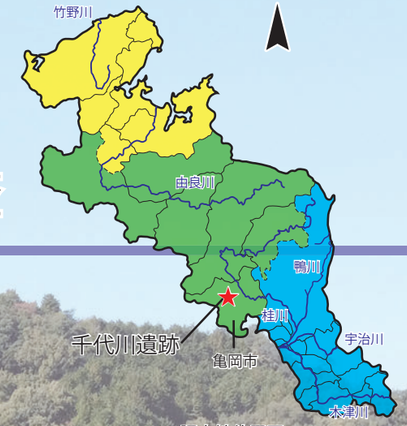
各地の調査事例から、今回見つかった木樋、溝、木材集積遺構では、水を用いた祭祀が行われていたとみられます。なお、今回の調査地やその近辺では、同時期の古墳時代の集落跡がほとんど確認されていませんが、北東 500m に位置する扇状地上には、古墳時代前期末～中期初頭に築造された、木樋と同時期前後の可能性があり首長墳と思われる直径 30mの円墳である拝田 14 号墳が存在します。当時の景観を想像すると、調査地内で行われた古墳時代の水の祭祀は、集落の内部ではなく、遺跡周辺の耕地全体が見渡せるような水源に近い当時の首長墳の造営地に近い場所で行われていた様子がうかがわれます。今回の調査成果は、亀岡盆地における古墳時代の祭祀、さらに地域開発のあり方を考える上での貴重な成果と言えます。

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3
http//www.kyotofu-maibun.or.jp

WEB　X（旧 Twitter）　Facebook

京埋セ現地説明会資料 24-7
令和６年 12 月１日（日）

千代川遺跡（ちよかわいせき）第 37 次調査

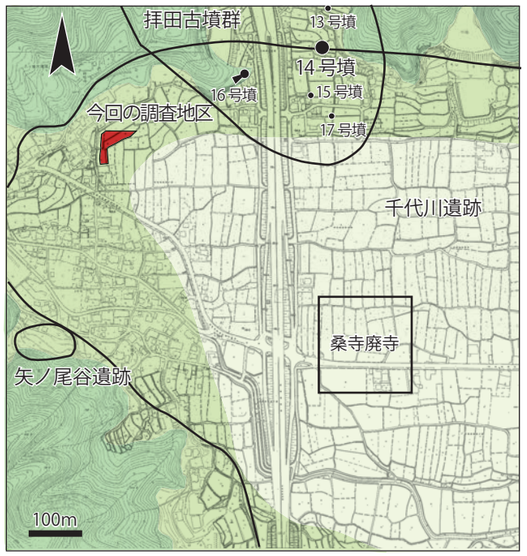


調査地位置図

調査場所　亀岡市千代川町北ノ庄淵田
調査期間　令和６年５月７日～令和６年 12 月中旬（予定）
調査機関　公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

はじめに

今回の発掘調査は、国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」の実施に先立って行ったものです。千代川遺跡は東西 1.4km・南北 1.9km の広大な遺跡で、これまでに 36 回に及ぶ発掘調査が行われ、縄文時代から中世に至る多数の遺構と遺物が見つかっています。今回の調査地は、行者山東麓の扇状地上に位置しています。

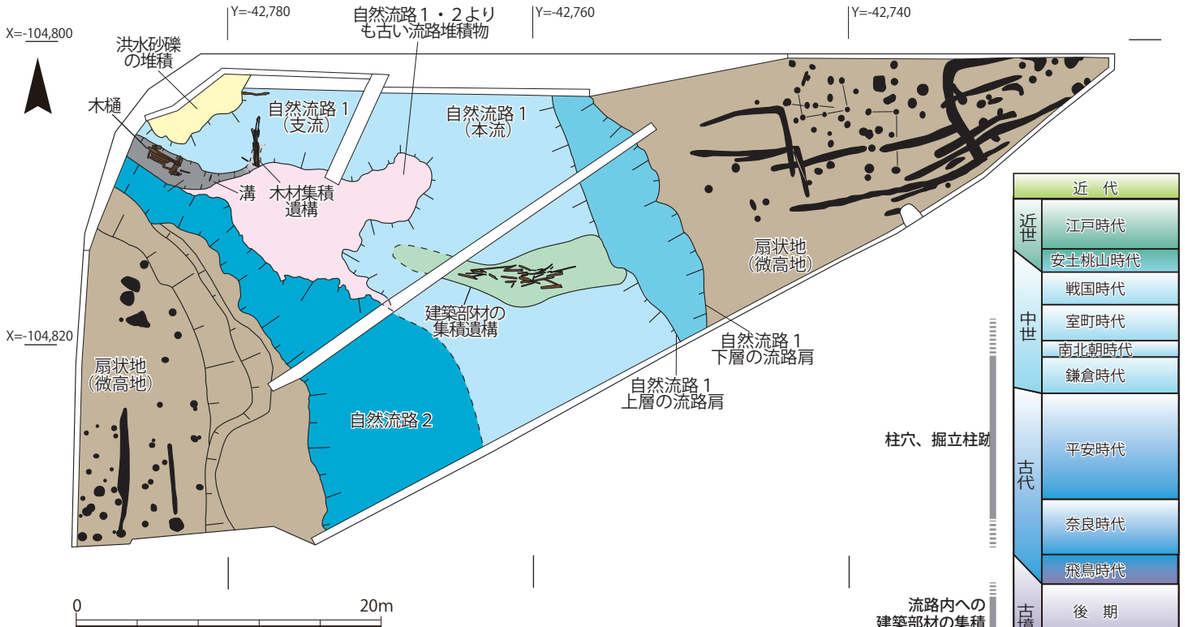


第１図　調査地位置図

発掘調査の成果

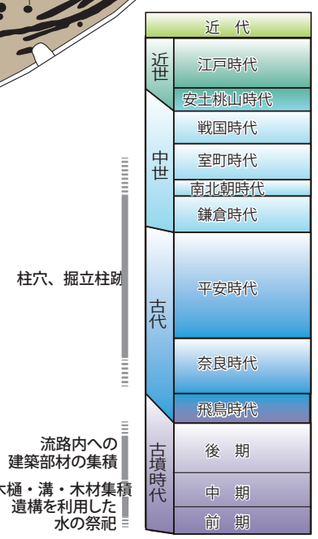
今回の調査では、古墳時代の自然流路１・自然流路２、木樋、木樋の下流に続く溝、木材集積遺構、建築部材の集積遺構などを確認しました。自然流路１は、本流と支流があります。木樋や木材集積遺構は、支流に設置されていました。建築部材の集積遺構は、自然流路１の本流の埋没が進んだ段階で形成されました。

また、自然流路の両岸の微高地では、古代から中世にかけての柱穴や掘立柱建物が確認され、自然流路内の縁辺部では古代の遺物が多く出土しました。



・黒塗りの遺構は、古代～中世の柱穴、土坑、溝跡を示す。

第２図　調査区平面図

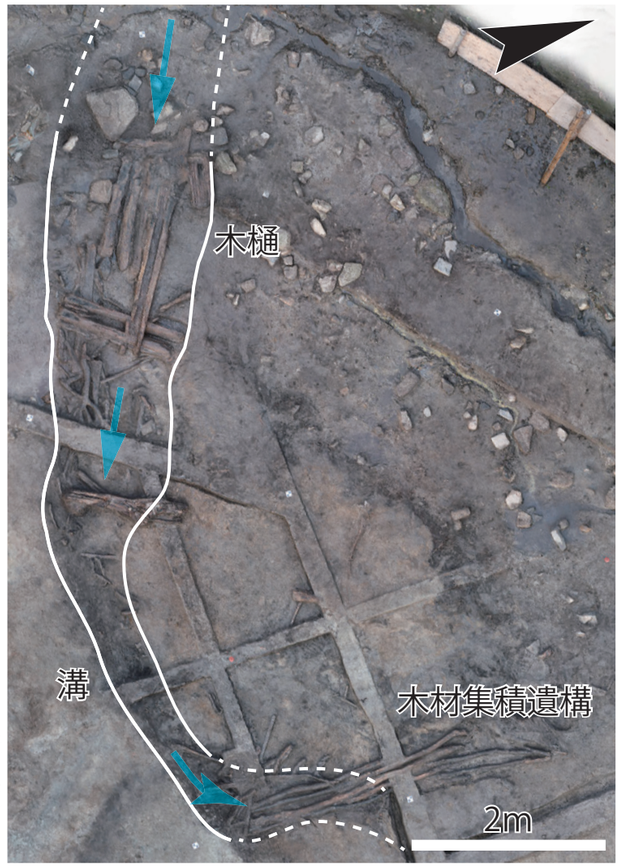


第１表　年表

古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、２つの時期に形成されています。木樋、木材集積遺構、溝および自然流路１の下層の段階は古墳時代前半期（４世紀～５世紀前葉）、自然流路１の上層段階と自然流路２および建築部材の集積遺構は古墳時代後半期（５世紀～６世紀）と考えられます。木樋、溝、木材集積は、自然流路１の細い支流を流れる水を流した遺構と考えられます。木樋は、木樋本体と土台となる木材で構成されます。木樋は長さ 180cm、幅 20cm の木材に、幅 10cm、深さ 3.5cm の断面が方形となる溝が彫り込まれています。土台の木材には、長さが均一な５本の丸太材などが使用されています。木材集積遺構は、長さ１～２m、直径５～７cm の丸木材 10 本程度が並べられています。

自然流路１の上層で検出された建築部材の集積遺構では、多数の建築部材および須恵器片２点と有孔円板１点が出土しました。また、自然流路２では、須恵器１点と管玉１点が出土しました。



第３図　木樋・溝・木材集積遺構の検出状況
【青い矢印は水の流れの方向を示す】

写真１　木樋と木材集積部【青い矢印は水の流れの方向を示す】